

特集

「命を守る環境整備、生

行政で目的一致も共

5月で設置から3年

『赤ちゃんポスト』

きづらさ^{抱える}母子に寄り添う、一

同、至難!?

の是非を問う



国内では熊本県と北海道当別町に設置されている通称『赤ちゃんポスト(ベビーボックス)』。複雑な背景から、親が育てることのできない子どもを匿名で受け入れるもので、当別町に設置される赤ちゃんポストはこの5月で丸3年を迎える。

周知が進む一方、道は今も「医療提供体制が不十分」として撤廃の要請を続ける。SNSでも賛否の声は尽きない。設置した『ごどもSOSほっかいどう』代表の坂本志麻さんに赤ちゃんポストの『今』と『未来』を訊いた。(本誌記者・川上 猛)

広がり続ける支援の輪

坂本さんの自宅の玄関とリビングの間にある縦約230センチ、横約80センチ、奥行き約110センチのスペースをリノベーションした空間が『赤ちゃんポスト』だ。乳幼児用の布団が敷かれており、基本的には手渡しで赤ちゃんを受け取るが、対面を希望しない場合でも子どもが置かれると赤外線

センサーと動作感知カメラが反応。坂本さんに通知が送られる仕組みで、これまで2人の命を受け入れている。赤ちゃんポストの主な役割は、小さな命を守ることのみならず、育児が困難な親が新生児を殺害・遺棄するような犯罪を防ぐことにもある。

景とする予期しない妊娠によって、新生児を遺棄する事件が相次いでいることを鑑みれば、赤ちゃんポストは命を救う重要な役割を担っていると言えるが、「育児放棄を助長する取り組み」といった批判の声は今も鳴り止んでいない。「多方面からさまざま深いご意見をいただいている」坂本さんは今も寄せられる「意見」に耳を

傾けているが、「意見も批判も関心があるからこそ」と前向きで、運営自体に影響はないという。

赤ちゃんポストが設置されたこの場所は、元々子どもの居場所として5年ほど前に開設(鹿児島県から移転)。DVや虐待などで居場所を失った子どもや不登校の児童や生徒、時にはその親も受け入れ、寝食を共にしてきた。「手を差し伸べなければ生きることが諦めて

いた親子がいる。誰かが支えてあげなければならぬ」表現の良し悪しはともかく、坂本さんがこれまで培ってきたノウハウがあつてこそ子どもたちの居場所と赤ちゃんポストの両立と言えるのだ。「子どもたちのお世話を直接的にしてくれている方は8人。間接的に支えてくれる方は道内外に100人以上」と支援の輪も広がりをみせており、その形

もさまざま。「漁師の方が新鮮な魚を差し入れてくれる。子育て世代のママさんが洋服を持ってきてくれる。年金を受給されている方の協力もある。子どもたちの遊び場になつている隣の空き地も地主の方のご厚意によつて無償で提供してくれている。もつと言えば、まち役場の方々も見えない部分で支えてくれている。こうし

◀救われた命、はすくすくと成長している。壁のリフォームも支援者のご厚意によるもの



▶リビング横にある『赤ちゃんポスト』





続きは『月刊クオリティ』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)